娘に與ふるの書[[1]](#footnote-1)

香山光郎

尹古山畵

おはまだい。まだののことはあまりつてゐない。おさんはおよりは、くのをてた。たちのも、およりはくけてゐる。だからおさんは、おが、つたへをもつて、いをみ、せな人にならないやうにとつて、このをいてるのだ。

まづ一に、おにいひたいことは、おは、おさんのであるに、のであるといふことだ。にして、おのおさんにはこのへがりない。おがののいのとしてまれたことは、まことにせなことであるが、しかしおさんは、おがきつとの子となつて、おさんまでものおさんになるようにさせることをじてはない。

よ。おは、もうにつてゐるから、かういふことは、おさんにいはれなくてもつてゐるはずだ。しかし、おさらひのつもりでかう。おのつてゐるはのだと思ふ。それはのだね。さまが、おのたちをへて、な、なに、に、にするために、おてになつただ。も、も、も、このでかはりはないのだ。それは、、の學校である。そして、そこでへることはだとふ。はいろいろあつても、つまるところ、にへまつるなのだ。でも、でも、でも、、のものであるところの、すめらみくに、ちこののをり、くし、しくするためのでないものはない。

のは、のものなのだ。そのもももも、そして、そのに、またはそのにめるきとしけるものはいふもさらなり、そのにもれてゐるも、もわが　のものなのだ。おもおさんも、のにみ、のにつたものをしつゝ、ににへへまつつてゐるのだ。ものばかりではない、おやおさんのもも、のものであるのだ。おさんや、おさんやおたちによつてつくられた、このは何のためにあると、おは思ふ。それは、にへるためにあるのだ。このにんで、おさんはとして、みからかつたにんで、にへ、おたちのおさんは、として、おさんのをし、おたちをみ、おたちをて、おたちをけて、にげるのだ。そのことのために、わがのやがあてがはれ、々のやがられ、またによつてられてるのだ。おのはもなくにくのだが、おはのでにはかない。そのかはり、おはのとなり、のとなるのだ。とれては、にくことが、もつと[も]大きいおであり、またりであるのだが、のとなり、となるのもして、のにるわけではない。ととは、ののやうで、どの一がなくてもはかない。そのやうに、にへることも、ととで、するのだ。だからはのものだなどへてはならない。

がくてははない。から、をしたにはのといふものがあつた。きはきから生まれる。なからながめぬやうに、になから、にながまれることもかしい。のは、きとして、きとして、本のであるが、かゝるき、きのいはいになり、かゝるき、きのないはへること、いふまでもない。

きは、きになる。しきが、きになることはないのだ。

きとは、どんなのことをいふと、おは、ふ。

きとは、のなのことでないことは、おもよくつてゐる。がで、もななら、それこそ、一いだらうが、しかし、のなは、にりやがあつて、わがまゝちであるがいといはれてゐる。わがまゝはをはず、そのをり、そのをぼすであるが、ことににあつては、よりもしいだ。だから、おさんは、おののけしたことをにしてゐる。おがしきの一をるには、をることをめて、をにかねばならない。をにくとはのことか。わがのをることである。にしても、にしても、なだ。わがをにげてつて、われといふものをたなくなつて、めて、き、きになるのである。このはからる。われわれはのなるがに、にして、のわがまゝもない。たゞたゞをさゝげまつるのである。しかも、ありがたく、うれしく、さゝげまつるのである。しむところもなく、ましてをめることなんかに[も]、にもないのである。これがといふものである。これはのみにばかりられるであるからである。

このわがまゝのない、めるところのない、さゝげてさゝげてますますび、にまでもさゝげて、のをずる、このこそ、のであつて、このが、にしてしたにとなり、にするにとなり、にするにとなり、にするにとなり、にするにとなり、にするにとなり、いはゆるをむことゝなるのだ。このなきものには、どんながあると、おはふ。このなきものには、わがまゝがあるのだ。の、のばかりへる、わがまゝである。かういふものは、もも、からはれ、されるにきまつてゐる。まれものになつて、せになるのにつてかぬかぎり、かういふものは々なきにつてんでくことだ。

わがよ。おは、ゆめ、そんなわがまゝものになつてはならない。おは、のらしく、れをにするにきなくてはならない。おはにあつては、にひのためにくし、にあつては、にひ、ののために、すべてのをり、すべてのにんずるでなくてはならない。つのものをでほしがる、わがよ、おのがにるのだ。つのがあつて、一はなで、一はなであつたら、わがよ、おは、そのなをるのだ。の、のばかりではない。なるでも、さうするになつてくれ。これこそ、のおびたまふところで、これにしたことはをおめげることだ。

このさへきげたら、おはなである。おはであるばかりでなく、のからされ、はれ、そしてき、きとなるのであらう。をるよりも、をるよりも、であるよりも、このことこそ、おをにし、あるものにするなのだ。

さゝげるは、へるである。にへるをしてといふ。これちのであり、であるのだ。おがにすべきは、にこのである。にへる。しみなくへる。しかももむるところなくへる。あゝとすばらしいであらう。おのは、このたるべきものなのだ。かののごとく、にととをふべきなのだ。その々しいを、わがよ、ゆめ、わがまゝのでらしてはならない。りりてりのないさいでさせてはならない。おは、いつでも、おのを十にらせてくれ。

のためをふ、ちわがまゝは、をつてさくし、しくすることだ。いつも、からかをひたがり、してひたがることはだ。たまにしたいことをやつては、ぐいをむなんて、さもしいことだ。まして、ちにいがないからといつて、をみをむことなど、かしいことではないか。わがよ、おはそんなになつてはならない。

おは、はに、はに、かいことをやつたに、それをしてはならない。いことをやつたなどんでもならない。いつもはいことばかりしてゐて、たまさかいことをするやうなは、のいことをにかける。しかし、いつもいことばかりしてゐるには、のやつてゐるいがになつてゐるから、いたつてなはづだ。それを一つえることもないだらう。おはれなをたことがあるだらう。そのは、いつもからをつてばかりゐるから、からをつたか、えてゐやしない。おはにやつてばかりゐるから、にをやつた、はをしてやつたなどえてくことはないだらうぢやないか[[2]](#footnote-2)。おはにへたことよりも、からつたことをくくするはづだ。つたことはれて、へたことをするやうなでは、ないだ。さういふがいや良いにならうはづはない。

がのに、がのにくした々のことを一々してにかけるとしたら、どうだらう。しかし、さういふさへないではない。

わがよ。おは、きつとき、きになるのだよ。これこそ、にいたてまつる一きいことであり、またおさんやおさんへのもつともきいなのだ。そして、おが、おのたちを、さういふでてあげたら、このはいいになる。

わがよ。おさんは、おが、やになることをまない。おがやになることもはない。そんなものになつていことはないが、おさんが、おに、むところは、のき、のきになることだ。

1. 『日本婦人朝鮮版』1944年6月 [↑](#footnote-ref-1)
2. 「ないだらうぢやないか」は非文。「できないようになろうじゃないか」の意と思われる。 [↑](#footnote-ref-2)